

中
勘
助

鶴
の
話



鶴
の
話

最初の語りてとして幾百千羽の鳥のなかからまっ先に王様の前へ進み出たのは丹頂の鶴であった。王様をはじめきら星のごとく居並ぶ人びとの目はこの前代未聞の催しに名誉の先頭をきって語られる話がどんなものだろうという好奇心をもつて、みみずくの耳みたいを立てられた耳とともにこの鳥一羽のうえにそそがれた。一方後に控え鳥たちはいわば卵の殻のなかから衣冠を正して出てきたらしい端麗な彼らの仲間がいわゆる大鳥歩みにゆら

りゆらりと歩み出る様子を見ては、いかに自分の美しい羽色や姿に自信をもつものも思わず感嘆のといきをもらさずにはいられなかった。彼には全身に高貴の相がそなわっていた。雪のようなからだ、塔のような頸くび、殊にその真紅の頂は今さしのぼる太陽に似て光を放つかと見え

た。
「昔むかし日本で平城へいじょうと申すところに都があつた時のことでございます」

りりんんとした鶴のひと声であたりは水をうったように静まった。黒鶴、まな鶴、なべ鶴、姉羽鶴あねはづるなど鶴もい

ろいろあるなかに、これは鶴の王ともいうべき丹頂の鶴が種族の誇りとして語りつたえた話である。

毎年寒い季節になるとそれまでの住みか、人間の知らない愛の秘境、北のはてなる荒野を雪と氷のとざすにまかせて支那や朝鮮、日本など思い思いに南の国へと旅だつ彼らの大群のなかに、日本の和歌の浦を半歳の故郷とさだめた千羽ほどのひと群れがあつた。彼らは羽根も凍りそうな北風に吹きおくられ、日本海の荒波をこえて、母鳥の羽ぐくみを思わせる和やかな海べにおり、貝や小魚、草の根や水草などをあさって安穩な日をおくるので

あつた。ある年のこと冬もようやく過ぎ、春の歌のさきがけをするうぐいす鶯もそろそろ歌い疲れる頃となつたので、彼らは北の国へ旅だちの相談をはじめた。長い頸と足へのばし思いきり翼を張って、彼らの門出をことほぐ南風にのり、島じまのまわりにちらばる帆、縁どるように碎ける波を見おろしつつゆけば、やがて遊牧の人間のすむ大陸である。そこに馬をか駆り弓をひく人びとの頭上を高く飛んで、虎や狼、熊のさまよう森林地帯をこえればとなかい馴鹿の群れ遊ぶせんたい蘚苔の原野となり。愛の巢を営むにふさわしい沼沢もここかしこに見出せるであろう。この温暖な国

の春の陽気が彼らの足をだるくしたのでもなく、ふんだんにたべた餌にあきたのでもないけれど、生れつきとしてその季節になると氷雪の白衣の下から蘇よみがえったような新しい大地のうえで誰に気がねもなく卵を孵かえし、雛を育てたいという押えがたい衝動を彼らは身うちに感ずるのであった。それに日本の住民は親切だとはいうものやはり人間の国である。いくら気儘にしてみたところで相当の気苦労がある。それにひきかえさして行く極北の秘境は季節のあいだいわば鶴の族やからにのみ残された地域である。そこにもろもろの地方から渡ってきた仲間と漂泊

中のよもやまの見聞を語りあうのはまことに楽しいことであつた。

「じやいよいよ風のいい日を見てたつことにするかな」と重立った一羽がいった。

「そうしよう」

「そうしよう」

と皆が賛成した。

「だが巢をつくるのがまたひと苦労だな」

「苦労っていえば苦労、楽しみっていえば楽しみさ。それ楽は苦の種、苦は楽の種っていうじやないか」

「そうだ、そうだ。そりや枯枝なぞ集めてしっかり巢を組むつてことは骨が折れるにちがないがそこに坐つて卵を温める気持ちはまた別だからね」

「私どもは愛の記念に雌雄一つずつの卵をかえすことにいたしております」

と語りての鶴が勿体らしくいった時に鳩が胸のうちで 私たちだつてそうだ と思つた。

「また当分はあつちこつちの話で賑かだらうよ」

「そうだ、支那歸りの連中はなんとかいうお妃きんぎの樽でもちきりだらう」

「楊貴妃か。だが私らの目にも綺麗にみえるとすりや相
当なもんだな」

「楊貴妃と軽わざかね。軽わざなんざ人間がやればこそ
さ、私らみたいにいつも宙を飛んだり高いところを歩いた
りしてるものにや面白かないよ」

「まだまだ、幻術をやつがある。騙だまし上手な人間の目を
くらますてから怖いみたいだ」

「罰あたりさ。なにもそんなことをして世間を渡らなく
てもいいだろうに」

そんな無駄話をしてるところへ近ぢかにこの和歌の浦

へみかどがおいでになるという噂が伝わってきた。噂のもとには都の東大寺の鳩で、それが口伝えに浦の鳩につたわり、ほかの鳥の耳にもはいつて、旅だち間際の鶴を驚かしたのだ。宮仕への人びとは晴れの日の用意に忙しく、町じゅうその話でもちきつてるといふ。

「おい、きいたか。本当らしいぞ」

「本当ならどうする」

「いくら私らが長生きだってそう度たびあることじゃない。まあ運よく居合せたというものだ。出立をのばそうじゃないか」

「ひき残る鶴かね。だがすばらしいみやげ話だ。こうなると楊貴妃なんぞ古いよ」

「まあここんどこ暫くのばしたからって卵が転げ落ちてしまふ訳じゃない。ゆっくりたつことにしよう」

「それがよかろう」

「そうしよう」

と一同異議なく出発をのばした。それをきいて鶴こじうの鳥ものばせば白鳥ものばす、雁鴨も見合せにするところへ燕が渡ってくるという工合で、浦はいつにない賑いであった。

「みかどは大層信心ぶかいおかたで国ぐにに残らず寺をお建てになるとかなったとかいいうじやないか」

「そこで鳩が助かるだけでもたいしたものさ」

「東大寺の大仏様とかはとても大変なものだそうだな」

「そうだ。あの燕の奴が巢をかけようと思って鼻の孔へはいったはいいがあんまり広すぎてどうにもならなかったとさ」

「鳶が頭とびのてっぺんへとまろうと思って力りきんでみたものの眉毛のへんまでがやっところさだったてじやないか」

彼らの話も人間のそれと同じによほど大袈裟になって

いた。

さていよいよという日に鳥たちは早朝から今日を晴れとばかり羽根の掃除をしたので見ちがえるように奇麗になった。鶴は長い頸を長くして今か今かと待ち、白鳥は肩がこるほど首をつつ立てて威儀をつくろい、雁鴨は興奮して、尻尾をびよろびよろさせてばかりいた。鳥ばかりか魚までが聞きつたえて我も我もと寄ってきた。鯛は蘇芳玉虫すほうの衣裳をつけ、若いものは緑の玉飾りまでかけていた。そのほかさわらや鯖さばは小紋、鰹かつおは縞、まぐろは黒無地、おこぜは絞りと、思い思いのなりでわんさと

押しかけたので、さしもに広い浦も彼らの群で雑沓し、水の色が染めかえたみたいになった。魚ばかりか貝までやってきた。帆立貝は波のうえに貝殻の帆をたててきた。お仲間の月日貝も錦貝もきた。汐のひいた遠浅の海底にはあさり、はまぐり 蛤、赤貝をはじめ、あわび 鮑、さざえ、たこの枕など、いろいろさまざまのわたつみの住民たちが名工の手にちりばめられたようにちらばっていた。その日はまことにみゆき日びより和ともいうべき穏かな日で、沖にはほのぼのと霞がたなびき、甘やかな太陽が円まどかな昼の夢のように輝いて、不老の酒に似た磯の香をはこぶあるかな

きかの風の流れは千歳ちとせをことほぐ岸の松が枝のそのひと
 枝をも鳴らさない。岡には松の緑のほかにつつじ、山吹、
 海棠かいどう、藤の花などが咲きつぼみ、野には董、たんぽぽ、
 きんぽうげなどが錦をしいている。海は和なごやかな揺籃ゆりかごの
 歌を口ずさみ、浅瀬に絹糸の網を投げる。自然はさなが
 ら海市かいしと化したようにみえる。折しもはるか彼方から浜
 べにそうてしずしずとみゆきの行列が近づいてきた。そ
 れは今がはじめての鳥や魚介たちにはまったくもの珍し
 く、なにか夢みたいでもあり、童話みたいでもあった。
 みかどの御乗物はちようど鶴の群のいる干潟のまえでと

まった。お供の人びとはとさかみたいなものを頭につけておおよそふくら雀みたいな恰好をしている。そこで月げつ卿雲客けいうんかくたちはめいめい歌をよんでみかどのおききにいった。

なかにも山辺やまべの赤人と申す人は歌の道には名を得た人で大層みかどの思召おぼしめしにかなっておいりました。その歌は

おきつ島ありその玉藻潮干みちて

かくろひゆかば思ほえむかも

と申すのでございました。さて御機嫌うるわしく皆の歌をおききになりましたみかどは四方よもの景色を御覧になつて

「燕がきて久しうなる今日鶴が帰らずあのように群れておるはどういたしたとか、赤人行つて鶴にきいてまいれ」

と仰せられました。赤人は畏かしこまり干潟のはしに近づいて声高く

「これそれなる鶴ども、燕がきて久しゆうなるにおまえたちはなぜ帰らぬか、たずねてまいれとのみかどの仰せ

である」

と呼よわりばましたれば、千羽の鶴は一同に首をたれ、なかで頭かしらだった一羽が進み出て前に述べました次第を語り、自分たちにならつて白鳥も雁鴨もみな旅だちを見合わせておりますと申上げました。みかどは赤人から事の仔細をおききになり御機嫌殊のほかうるわしく

「赤人そちは歌の上手じゃ、さればいま一首鶴の歌をよめ」

と仰せられました。赤人ははつと畏まりましたが、あまりのありがたさに気も顛倒いたしましたか、

鶴 鶴 とばかり心はあせつても歌になればこそ、その名のとおり顔を赤くしてそのまま地の下へかくれてしまいたそうに汗を流しております。待てどくらせど歌は出ず、日永の日も傾いてまいりますので、はじめ妬み心から きょうこそ赤人が赤恥じをかきおったわい と胸のうちであざ笑っておりますました者までも これはどうなることか と気をもみだし、鶴は鶴で 自分たちの話から とんだことになったものだ、歌がよめるならこっそり教へてあげようものを、これが世にいう果報負けというのだらう と翼のつけ根をふるわせてはらはらしております

す。人びとはもとより幾千羽の鳥たち、幾万匹の魚介の目が石のごとくにうずくま 踞った赤人ひとりに集ってかたずをのんでゐる時、干潟の穴から這い出した潮まねきだけがいつもの癖を出し大きなはさみを動かして潮を招きよせるような恰好をしておりました。かように息がつまりそうな刻々がすぎてゆくうちにかからかにひいた潮が次第に満ちてまいりましたのを皆は赤人にばかり気をとられて誰ひとり、一羽の鳥も気がつきませんでした。そこへ折しも沖のかたからにわか 俄に吹いてきた風にあお 煽られて大きな波がざんぶとばかり鶴の群にうちよせ、しぶきが頭か

らしたたかにかぶりしました。不意をうたれた鶴はびしよぬれになってびっくり仰天し、御場所がらをも忘れ一度にかつと声をあげ、ごうつと羽音をさせて飛びたちました。そのとき赤人は夢のさめたごとくはつと我にかえり、彼方にみえる若葦わかあしの生えた渚をめぐりこつと鳴きつれて白い嵐のように飛んでゆくさまを眺め、たちどころに

和歌の浦に潮みちくれば瀉をなみ

あしべをさしてたづ鳴きわたる

とよみあげました。人びとも蘇生の思いをすればみかども御感ぎよかんななめならず

「やよ赤人、今まではそちを歌の上手とばかり思うていたがまことにそちは歌の名人じゃぞ」

と仰せられました。赤人感涙にむせんで申すには

「赤人はただありのままを、文字につづりましたまでのことでのなんの手柄もございません。おそれながらあの鶴こそお褒めにあずかるべきでございます」

赤人は歌の名人なばかりでなくほんとうに正直で謙遜な方でありました。そこで龍顔りゆうがんいよいよ麗しく

「さらば赤人あの鶴をここへつれてまいれ」

との仰せ、赤人は翼がありませんので鶴がほんのひと飛びにしたところをえっちらおっちらやや暫く歩いてまいり、ちよくじよう勅 詔をつたえ鶴をつれて戻りました。みかど御声高らかに

「やよ鶴よ、汝らはそれなる赤人にたぐい稀なる歌をよませたによって褒美をとらせるぞ。近う寄れ」

と仰せられましたれば、鶴どもは恐る恐る御前に歩み寄って畏まりました。その時みかどは、やおら御手をのべさせられ、一羽一羽彼らの頭をなでられましたところ、

さすがが日の御子の御手に触れて彼らの白い頭がみるみる日の出の色に染まりました。これがめでたい丹頂のいわれでございます。

(昭和二十年八月)

日本文学電子図書館

鶴の話

著 者：中 勘助

制作者：宮澤一郎

底 本：現代日本文学大系 29
筑摩書房

昭和46年6月25日 初版第1刷発行



日本文学電子図書館